

韓国の第7次教育課程における水準別教育の展開過程と その教育的意義に関する実証的研究

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、韓国の第7次教育課程において導入された水準別教育に着目し、第1に、地域教育庁(行政)の政策展開過程、第2に、学校現場の実践事例、第3に、生徒(中学校2年1888人)による調査に依拠し、水準別教育の政策展開過程を明らかにするとともにその実施の持つ教育的意義を実証的に検証することにある。

本論文は第二部構成になっており、第I部(第1章と第2章)においては、水準別教育がなぜ、第7次教育課程において導入され、実施するようになったのか、その政策動向と推進過程を中心に検討した。その結果、韓国の水準別教育の導入・実施の意図が、第6次教育課程から強まってきた平等性への批判、すなわち、平準化政策(1974)への批判が根底にあったことが明らかとなり、教育の平等性(Equality)と秀越性(Excellency)という、いわば一見相反する両者の統合原理を、「水準別授業」を通して具現しようとするものであった。

これに対して、水準別教育をめぐるさまざまな論争が学校現場の教師を中心に拡大されるなかで、学校現場から上がってきた実施上の「負の問題」に対して、地域教育庁は学校との政策的フィードバック機能によって、「負の問題」に対する条件整備を実施し、学校での水準別教育実践において一定の「負の効果」が克服されることとなった。

続いて本論文の第II部(第3章、第4章、第5章、第6章)では、こうした水準別教育の展開過程を踏まえて、まず第3章(水準別学力層別)と第4章(父学歴階層別)においては、生徒の学校外での諸生活様相の違いが、学力を規定する部分は大きいという(金2005, 荊谷2004他)仮定のもとで、生徒の諸背景的要因が、水準別学力層別(=①深化型=学力上位層, ②基本型=学力中位層, ③補充型=学力下位層)にどのような差違を生みだしているのかを明らかにした。その結果、生徒の取り巻く諸様相、すなわち、生徒の社会的・経済的・文化的な背景の違いが、生徒の学力に影響を及ぼしていることが認められた。とりわけ、学力と「通塾」関係、「親学歴階層」とは非常に密接な関係を持っていることが明らかとなり、学力が高いほど通塾率が高く、親学歴階層においても同様な結果として明らかになった。

こうした水準別学力層別に現れる諸生活様態、それに帰結される諸「格差」問題を踏まえた上で、次の第5章では、現在「水準別授業」を実施している中学校の実践事例を通して、水準別教育がどのような教育的特徴を持ち、今日の学力格差問題をはじめ、平等性と秀越性という異なった原理の統合が現場ではどのような形で実現を図られたのかを考察した。

その結果、明らかとなった特徴として4点に集約することができる。第1に、「競争主義」的な教育

の弊害が現れないように、競争原理に基づく「トラッキング」とは異なる水準別授業を目指し、「教え・学び合う」共同による授業の実践が実施されたことを指摘できる。第2に、教師の生徒への多角的な「配慮」が存在したことである。第3に、平等性を重視した補充型クラスに格別な「配慮」と力を入れていたことである。第4に、社会階層差を根底におく「平等性」を考慮した授業実践が見られたことである。

第6章では、水準別授業を実際に受けている生徒調査から、水準別教育の「効果」を検証した。本論文では、「水準別学力＝①深化型、②基本型、③補充型」、「水準別授業の実際＝①共同体型授業、②従来型授業」そして、「水準別授業の効果＝①成績＝学力、②学習意欲、③友人関係」の3つの指標を「水準別授業の実態」構造モデルを設定・定義し、「水準別学力」別によって「水準別授業の実際」に差異があるのか。もしあるとするならば、水準別授業において展開されている「共同体型授業」と「従来型授業」によって生徒は具体的に「成績＝学力」、「学習意欲」、「友人関係」においてどのように変化し、その変化は「共同体型授業」と「従来型授業」との間でどう異なっているのかを検証した。

これらの指標を用いて、学校別・学校種別にその実際は異なった形で実施される可能性があると考え、水準別授業の実態を単純対比で学校別・学力層別に比較するだけでなく、学校種別、すなわち、「進学重点校」対、多様な生徒が学ぶ「一般校」との比較検討を試み、どちらの学校において水準別授業の効果が見られているのかを明らかにした。本章では、これに止まらず、多様な課題と問題を抱えながら水準別授業の効果を上げているC中学校の一例を取り上げ、水準別教育の効果を上げるためにはどのような授業実践と体制が必要なのかを明らかにした。

以上の分析を通して、5点指摘することができる。すなわち、水準別授業の効果は、第1に、学校が目指す「教育目標」や学校が基盤としている地域・親階層の差違によって、水準別授業の実施形態は異なる形として現れることを指摘できる。すなわち、初期段階からレベルの高い高校への進学を目指すという学校とそうでない学校との水準別授業の効果は大きく異なった形で現れ、水準別授業の効果は、進学を強く意識した学校においては「正の効果」よりむしろ「負の効果」として現れたこと。とりわけ、基本型や補充型においてその負の効果が顕著なほどに現れたこと。それは、従来とまったく変わらない一斉授業形式をとったこと。第2に、従来型授業より共同体型授業を重視した学校に水準別授業の効果は明らかに大きいことを指摘できる。第3に、生徒の①学力、②学習意欲、③友人関係に強い正の効果を持っているのは、「共同体型授業」であったことを指摘できる。第4に、学校教育への生徒・親の参加と権限を重視した授業実践したこと。すなわち、国で定めた教育方針が学校現場に下され、それがそのままの形で生徒に強制的に授業を実施するのではなく、C校の水準別授業の実施・運営において多く見られたように、学習の主体である生徒・親の意見を尊重し、「強制型」ではなく生徒・親の「参加型」であったことが確認され、実施を取り組んでいたことである。第5に、親と学校・教師の「共同」による、水準別授業の実施・運営を取り組んでいたことを指摘できる。

水準別教育の論争は、ともすれば、アメリカの失敗事例を持ち込んでそれがあたかも韓国でも失敗するような風潮が強い。Well & Oakesら(1996)が言うように、水準別教育の実施はその社会の文化的・政治的・教育的な文脈で理解し捉えなければならないという、主張は示唆するところが多い。すなわち、韓国型水準別教育は韓国の社会の文化的・政治的・教育的な文脈で捉えた分析が求められる。

韓国の水準別教育の実施は、本研究で見ると、ある一定の条件整備や以上で見てきた諸条件が満たされることによって一定の成果を果たし、平準化政策がもたらした学校内学力格差の縮小にはその機能を果たせると可能性をもっている。しかしながら、こうした水準別授業の定着にはまだ現段階では

問題と課題を抱えていることも事実であり、今後の政策的支援がますます求められるだろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 町 井 輝 久
副 査 教 授 小 内 透
副 査 教 授 三 上 勝 夫 (北海道教育大学)
副 査 准教授 有 田 伸 (東京大学)

学位論文題名

韓国の第7次教育課程における水準別教育の展開過程と その教育的意義に関する実証的研究

本論文は韓国の第7次教育課程の施策として全国規模で実施された水準別教育の韓国教育における教育的意義について主に学校及び地方教育庁でのヒヤリングと生徒へのアンケート調査（ソウル・釜山両市の6中学校 1888人）をもとに検証するとともに、わが国でも「習熟度別学習」として論争されている水準別教育の教育的意義について新たな論点の提示を行ったものである。

本論文は2部から構成され、第1部では政策の展開過程について、第2部では韓国の中学生の学びと生活の実態を踏まえて水準別教育の効果と問題点を主には生徒調査によって分析している。本論文が韓国教育研究およびわが国では「習熟度別授業」として論じられている教育課題研究において達成された成果はつぎの通りである。

まず研究方法上での独自性として評価されるのは学校等への面接調査を通して、水準別授業の授業形態が、生徒の学習意欲や友人関係とも深く関わっていることに着目して、「共同体型授業」と「従来型授業」の2つの概念を設定し、生徒調査の解析に重回帰分析の手法を導入していること、また水準別教育が効果をあげるための学校のあり方について、詳細な学校調査によって得られた資料を基に、教師の関わり方、保護者の関わり方等について詳細な分析を行っていることである。

このような研究方法によって達成された成果を以下列挙する。

(1) まず第1に水準別教育政策の実施過程においては、行政施策が一方的学校に下されたりするのではなく、試行的実施過程の中で明らかになった水準別教育を実施する教育条件について学校及び保護者等の要求が絶えず学校現場から地方教育庁にフィードバックされ、IT 要員の配置や教科書づくり、成績下位層への配慮等水準別授業の実施のための条件整備が行われるとともに、学校の独自性を最大限尊重した施策が行われていることが明らかにされたことである。

(2) 中学生の学力を「深化型」「基本型」「補充型」の3つのタイプに分け、子ども達の学習状況について分析した調査では、父親の学歴階層と学力タイプが照応していること、

各タイプの生徒とも学校を楽しみ所と評価している点では共通しているが、「深化型」「基本型」では塾での学習を重視する傾向が高いのに対して「補充型」の生徒にとっては学校が自分たちにとって重要な学習の場として位置づけていることが明らかになった。それ故に学校での学力下位層に対する水準別教育の実践が大きな意味を持っていた。

(3) 水準別教育の実施にあたっては、地方教育庁レベルで TT 要員の加配などいくつかの条件整備が行われる一方、学校でも水準別教育にふさわしい授業方法の開発、とりわけ「共同体的授業」などを導入することにより、競争的環境による生徒の「友人関係」の解体や「学習意欲」の減退など水準別授業の「負」の側面を克服する様々な工夫が行われていることなどが明らかになり、本研究ではこのような仮説にもとづく生徒調査分析を通して、水準別教育に必要な授業の開発など水準別教育の効果が授業の実践形態と密接に結びついていることが明らかになった。また「友人関係の阻害」など水準別教育の「負」の事柄とされた側面についても、生徒達は「学び合い、教え合い」などを通して克服されていることもうかがえる結果を得た。

(4) 水準別教育が韓国の平準化政策の補完として位置づけられることにより、韓国的特質として一面的に競争主義的教育に傾斜するのではなく、より成績下位層の生徒への配慮が学校レベルでも重視されることになり、成績下位層の学力向上、学習意欲の改善にプラスの効果を生み出していることが明らかになった。また水準別教育の効果は多様な生徒が存在する一般校の方が進学重点校より高いことも明らかになった。

(5) 中学校の事例研究を通して、水準別教育の効果が上がる学校についての一つのモデルを提示したことは注目すべき成果である。すなわち水準別教育において効果の上がる学校とは、「共同体型授業」など水準別教育の負の部分克服する授業実践と生徒・父母・教師の参加型学校システムが要件であること、とくに後者は水準別教育を一律に強制するのではなく生徒父母の選択にゆだねること、教師、父母、生徒の水準別教育への共通理解を深めることが水準別教育の効果をあげることに不可欠であることを事例分析を通して明らかにした。水準別教育の実施には地方教育庁一学校間の水準別教育に必要な条件整備のためのフィードバック機能を持った政策過程と、父母・生徒の選択の自由を保障した上に立つ教師、生徒、父母による教育参与体制が不可欠であることが明らかにされた。

以上のように実証研究によってこれまでともすれば「負」の効果の強調にもとづき理念的に論じられてきた水準別教育の教育的意義について、学校レベルの実践過程と生徒の学びのあり方に関わる詳細な分析によって、研究を発展させる上でさらに検討すべき新たな多くの課題を提示したことは本論文の成果である。

韓国教育研究では教育における塾依存の高さ、あるいは「生徒の進路分化に対して学校教育システムの果たす役割は、日本より韓国の方がはるかに大きい」(有田伸)等、その否定的側面に関する研究は多い。しかし小中高の各学校において一斉に35人学級を実現したことに象徴されるように、学校現場においては平等性を重視する教員(及び教員組合)や父母の実践も根強く、韓国教育が平等性と卓越性の葛藤の中で本研究のように水準別教育の負の部分克服をめざし、学力下位層の子ども達に学ぶ意欲と生徒の人間関係を重視する実践が行われる可能性をもっていることを明らかにしたことは、新たな韓国教育研究の課題と展望を与えるものとしてその意義は決して小さくない。

以上の点において、本論文は北海道大学博士(教育学)の学位授与にふさわしいことを、本審査委員会は全員一致して判断した。